

2021年6月6日 聖餐式説教

聖霊降臨後第2主日を迎えました。今日から主日の祭色は緑色になります。緑色は年間で最も長い期間用いられる色で、イエス様の教えや奇跡物語を学びつつ、私たちも時間と距離を超えてイエス様との交わりを過ごす時になります。本年はこれから11月21日までの間、緑の期節を過ごしていくことになります。

さて旧約聖書を見ますと、最初の人間アダムとエバが、神様が用意されたエデンの園で過ごしていた時の物語が選ばれています。二人は園のどの気のみを取って食べてもよいことになっていましたが、園の中央の木の実だけは食べてはいけないと神様から命じられていました。二人はその約束を守っていましたが、蛇がエバをそそのかしたため取って食べてしまい、一緒にいたアダムにも渡したので彼も食べました。そのとたん、二人は自分が裸であったのに気づき、葉を綴り合せて腰を覆ったと書かれています。この出来事に続くのが今日の旧約聖書の箇所になります。

神様は、裸であるのに気づいたと聞き、さては取って食べるなど命じた木から実を食べたと気づき、アダムに問いかけます。アダムは、あなたが私と一緒にいるようにしてくださった女が木から取って与えたので食べましたと返事をします。エバは、蛇にだまされてしまったと神様に答えました。

この出来事は、人間が最初に犯した罪、すなわち、どの人間にも奥深くまで入り込んでいて人間が抜け出せないでいる罪であると言っています。二人はどのような罪を犯してしまったのでしょうか。

二人が約束を破ってしまったのが最初の罪だと思われることが多いのですが、実はそうではありません。約束を守らなかったのはもちろんいけないことでしたが、それを率直に認め、神様に約束を守れなかったのをあやまったならば、神様は必ず許してくださいました。二人の罪とは先ほどの答えにヒントがあります。

問って食べるなど命じた木から食べたのかとの神様の問いかけに対して、アダムは、私が悪いのではない、この女性が木から取って与えたので食べたのだ、そしてこの女性と一緒に過ごすように結婚を定めたのは神様ではないか、と自分の責任を認めようとしないうばかりか、間接的には神様のせいにして自分

の責任を認めなかったのです。そして女性は、自分が実を取ったにもかかわらず、蛇さえいなければこんなことにならなかったと、やはり自分の責任を認めませんでした。

このように二人が犯した罪とは、人のせいにする事だったのです。自分の罪を認めず、他人にそれを押しつけてしまう、人のせいにする事をもう少し正確にいうと自己中心ということになります。創世記の記者はこの記事を書きながら、人間の中で、人のせいにしたことのない人がいるだろうか、自分中心でないと胸を張って言える人がいるだろうか、人のせいにして人を傷つけたことなど一度もないと言える人がいるだろうか、いないとすれば、わたしたちもアダムとエバと同じ罪を背負って生きている、この罪から抜け出せないでいる一人一人である。私たちはそのことをよく認識し、反省しながら生きていかなければ正しく生きることはできないと言っているのです。

この罪の結果、人間は死なねばならなくなりました。またアダムには労働して生きていく務めが、エバは生みの苦しみが与えられたと書かれています。これは、人間がこの罪を忘れないために神様が定めたことだと言っているのです。そして蛇が這いまわるようになったのは、この罪の結果だとされているのです。

それでも神様は人間を深く愛するのをやめようとはなさいませんでした。時間と距離を超えて人間とのかかわりを続けられ、神様による人間の救いの業が始められることになったのです。イエス様がこの世界に来られたのも、神様の最も大きな愛の業であると聖書は語っているのです。

聖霊降臨後の期節、このことを私たちは頭に入れつつ、イエス様の教え、奇跡、たとえ話などから学びを深めていきます。主の導きのうちに、よい学びと信仰が養われますよう、共に祈り努めましょう。